

癌患者の家族内役割と 問題に関する文献研究

良知 雅美・塚本 康子

はじめに

家族の一員に病人が出現することは、これまでの家族内役割や家族機能に大きく影響を与える。特にその病人の疾患が癌の場合、治療が長期にわたるものが多く、患者はもとより家族への介護・精神的・経済的負担は大きい。家族の一員に病人をもつ家族は、それらの問題に対処していかなばならず、役割変更を強いられる。渡辺³⁾は、役割変更を強いられる家族は、それらの問題に伴う心理的葛藤へ対処していかなければならない、と述べている。家族役割がうまく変更できるか否かは、各々の家族背景や価値観などにより異なる。家族の一員に病人が出現し、その疾患ががんの場合、癌患者を支える家族の役割変更に伴い、どのような問題を抱えているのか、また患者、家族に対しての援助について文献をもとに検討し、研究課題を明らかにすることを目的とした。

文献検索

文献検索において、キーワードを「家族役割」「家族機能」「家族関係」とし、1995年から2001年までの国内の看護系雑誌を中心に行った。キーワードから検索した内訳は、表1のとおりである。今回の研究では癌患者の家族に焦点を当てており、各キーワードと「癌(看護)」と掛け合わせたが、1件もヒットしなかった。そのため各キーワードから検索された文献から癌患者の家族に関係した文献を抽出した。その結果、14件の文献から患者の家族内役割と問題について検討した。

表1 キーワードによる内訳

キーワード	本数
家族役割	3
家族関係	274
家族機能	73

文献検討

1. 家族内役割と問題

医学の進歩により、癌の生存率は年々上昇してきている。その結果、癌を患いながら生きていく期間が延長することによって、医療費による経済の圧迫、介護に費やす時間や肉体的・精神的疲労などさまざまな問題が絶えない。そのなかでも、患者がこれまで家族内で果たしてきた役割を他の家族員が代替することの負担は大きいと思われる。守田¹⁾らは、家族のQOLには年齢と症状数が大きな影響を及ぼしており、家族の年齢が65歳以下で、また症状数が多い場合は家族のQOLは低い傾向がみられた、と報告している。そのなかで、65歳以下の年齢層の家族の場合は、子どもの教育や親の介護、仕事上の課題など職場や家庭でも重要な問題を抱えている場合が多い。このような時期に、家族の一員が癌に罹患することで、患者の看病に加え、上記のような問題が複雑に絡み合い一層困難な状況となることが予想できる、と述べている。家族の年齢が低いということは、役割変更が大きいと考えられる。患者がこれまで家族内で果たしてきた役割内容によっても差が生じるだろうが、家族役割の変更がうまくいかなければ、家族機能にも支障をきたすこととなる。渡辺³⁾は、家族役割の変更がうまくいくか否かは、各個人の役割変更能力(他のメンバ

一役割を補えるか、価値観の変更が可能かなど)と、外因要因(拡大家族からのサポート、会社の理解など)にかかってくる、と報告している。患者が治療に専念できる環境を提供するには、医療や入院環境を整えることと同時に、家族環境を整えられるような介入の重要性も説いている。癌患者の場合、治療内容にも異なるが、入院期間や経過は長期にわたる。病状の進行により身体機能は衰え始め、役割は他の家族員へより移行されていく。癌患者における家族内役割変更は、一時的な役割の代替ではないことをふまえておく必要があると考えた。

2. 家族内役割をふまえた患者、家族への援助

学生の多くは、臨地実習において癌患者の看護上の問題として家族内役割の喪失の可能性をあげるが、実際の援助内容はなかなか深められない。患者の家族内役割の変更については着目するが、患者の役割変更に伴い、そこから生じた家族の家族内役割の変更にまで視点が広げられない。中村⁴⁾が、家族もケアの対象という視点に立つことの大切さを指摘しているように、患者とその家族ではなく、家族の一員である患者という認識をもつことが、患者理解により近づける一歩となるのではないかと考えた。

しかし、家族に対する援助の必要性は以前から指摘されているものの実際は難しく、かなりのスキルを要する。このことについて渡辺³⁾は、医療における問題の多くは医療者と患者、家族とのコミュニケーションにある、と述べている。多くの看護・医療場面において医療者と患者、家族との認識のズレを感じることもある。中村⁴⁾は、患者-家族関係と、患者-医療者関係は基本的に異なるものであると述べ、患者のQOLを維持・向上させるためには、密接な関わりを持つ家族との関係を良好に保ち、意思の疎通を図る事の意義を提唱している。患者、家族と積極的にコミュニケーションを図り、そのなかで信頼関係を築くとともに、医療者、患者、家族の三者間での認識を確認しあうことが大切であることを再認識した。

.おわりに

今回の研究においてテーマに絞った研究はなく、家族役割についての研究も非常に少なかった。それだけ研究の蓄積が少なく、今後の癌看護研究においては重要な領域であることは確認した。文献研究としては、国内の文献に絞ったことなど不十分であったが、しかし、そのなかから新たな視点や研究の必要性を再認識することができた。また、今回の研究に至る背景には学生の実習指導もさることながら、自分が現在体験している家族役割が挙げられる。そのような経験を通し、看護の視点を幅広くとらえられるよう、今後の研究につなげていきたいと思う。

.引用・参考文献

- 1) 守田美奈子他：がん患者を抱える家族のQOL, 死の臨床, Vol.22, No. 1, 1999, P.88 - 94
- 2) 本田彰子他：がん患者の家族の思いに関する研究 - 診断期から治療期における家族の思いの構造化 -, 日本がん看護学会誌, Vol.11, No. 1, 1997, P.49 - 58
- 3) 渡辺俊之：メンタルケア入門 - 患者さんの心を見つめるために - 家族関係のとらえ方, 整形外科看護, Vol. 4, No. 3, 1999, P.266 - 271
- 4) 中村めぐみ：がん患者の家族へのサポートと援助, 臨床看護, Vol.22, No.10, 1996, P.1511 - 1517
- 5) 中村めぐみ：癌患者を抱えた家族へのケア, ナーシングトゥデイ, Vol.10, No. 1, 1995, P.41 - 54
- 6) 中西達郎：がん患者家族の精神的負担の研究, 東京慈恵会医科大学雑誌, Vol.115, No. 6, 2000, P.777 - 785

- 7) 関根光枝ほか：がん医療におけるソーシャルサポート 家族機能のアセスメントと小児がん患者の家族への支援，がん看護，Vol. 5，No. 3，2000，P.207 - 210
- 8) 市堀美香：がん患者の精神的・社会的痛みに対する家族のサポートシステムの方向性 - 家族関係に由来する不安が強い患者との関わりを振り返って - ，神奈川県立看護教育大学校事例研究集録，Vol.23，2000，P.14 - 18
- 9) 加藤美紀子他：家族機能を引き出すことに焦点を当てた援助，日本看護学会論文集 30 回成人看護 号，1999，P.63 - 65
- 10) 磯野明子：看護者のもつ家族観を探る - 看護者の経験が家族観にどう影響しているかに焦点をあてて - ，神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，Vol.25，2000，P.513 - 519
- 11) 朴順禮：がん患者の PTSD 研究の動向，聖マリアンナ医学研究誌，No.76，2001，P.47 - 51
- 12) 平典子：がん患者における患者・家族が見いだす「意味」概念の検討，北海道医療大学看護福祉学部紀要，No. 4，1997，P.67 - 72
- 13) 東サトエ：がん患者・家族と看護者の新たな関係性の構築に関する研究(1) - 日本におけるがん医療と看護の史的考察：創成期から診療情報開示時代まで - ，鹿児島大学医学部保健学科紀要，Vol.11，No. 1，2000，P. 1 - 10
- 14) 安達慈由子他：ターミナル期にある患者・家族の参加をめざした看護計画，看護実践の科学，Vol.25，No. 8，2000，P.30 - 34

(2003 年 3 月 20 日 受理)